企業の枠を超えた議論

BIM　IDEATHON

中核世代（Over 40）からのメッセージ

新たなステージに向けて
次代つなぐ思い共有

企業の枠を越えてＢＩＭの未来を考えるイベント「ＢＩＭ　ＩＤＥＡＴＨＯＮ（アイデアソン）」が、７年ぶりに開かれた。次代を担う若手世代のUnder40（40歳未満）と中核世代のOver40（40歳以上）が、日頃の業務でＢＩＭと向き合う中で感じている思いを共有し、進むべきＢＩＭの未来について意見を交わした。2026年春から確認申請ではＢＩＭ図面審査、29年春からはＢＩＭデータ審査が動き出す。まさに日本のＢＩＭが新たなステージに踏み込もうとしているタイミングでの開催となった。企業がＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）推進に乗り出し、その基盤を成すＢＩＭデータの利活用は多様な広がりを見せようとしている。先導役となる中核世代のＯ40は到来した流れをどう受け止め、次の時代にどうつなげようとしているか。ＩＤＥＡＴＨＯＮに参加したＯ40のメッセージを通してＢＩＭの未来を描いた。

私が描く ＢＩＭの未来

専門の垣根を超えて

日立建設設計
青木　隆広

各専門の設計情報を集約・連携・共有し、繰り返し作業はアルゴリズムに置換え作業の省力化を図り、設計者に創造的な検討を行う時間を確保する。法適合や他の定型的な確認は構造の一貫計算を建物全体へ拡張する形で段階的に合理化する。従来の専門間の分業の垣根を超え、業務範囲や時間的な制約でできなかった検討により建築の質を向上させる未来を描きたい。

データからの建設にシフト

清水建設
飯田　洋二

ＢＩＭは建設業のシミュレーターである。多くが一品生産の建設業ではＢＩＭデータを入力するため多大な労力と時間が必要となり、現時点ではシミュレーターとして成立していない。しかしＡＩの進歩により、入力手間の大幅な軽減が予想される。近い将来「図面からの建設」から「データからの建設」というパラダイムシフトが起こり、施工が著しく効率化されＢＩＭがその中心になる。

眠れるＢＩＭの覚醒

三菱地所設計
石橋　紀幸

ＢＩＭに格納された情報は、現場・設計・発注者が使いこなせない『眠れるデータ』であった。だが、ＡＩで属性や用語を紐づけることで、各情報を引き出し、これを元に対話できる環境が整いつつある。ＢＩＭを「活かせるデータ」とするために、価値と公開情報を見直し、「産業基盤の更新」を進めることで、人の創造性と判断力が生きる建設産業へと進化できると考える。

メリット享受できる未来

大塚商会
内田　竜哉

建設業のＤＸに伴い各種技術が日進月歩で進化する中、ＢＩＭまたはＢＩＭの関連技術を活用できるユーザーとできないユーザーに生じる格差を懸念している。ＥｘｃｅｌやＷｏｒｄのように「誰もが普段使いできる状態」が望ましく、その理想と現実のギャップを埋める手段としてＡＩの発展に期待したい。スキルに関係なく誰もがＢＩＭ活用のメリットを享受できる未来であってほしい。

デジタルツインの進化

安藤ハザマ
岡田　隆司

ＢＩＭの未来はデジタルツインの進化によるSociety5.0の実現である。現在は建物の設計・施工・維持管理段階でＢＩＭデータを活用し、建物品質の向上や業務プロセスの効率化に留まっている。今後はＢＩＭデータがデジタルツインとして価値を高め、サイバー空間とフィジカル空間の融合によってデータ連携・蓄積・活用されることで、社会がより便利で快適になることを期待する。

誰もが直感的に捉える未来

佐藤総合計画
櫻井　恵子

ＢＩＭによる設計や情報管理の可能性を日々実感している。今後ＤＸを積極的に取り入れ、建物情報が設計・施工・運用の全段階でリアルタイムに共有され、誰もが直感で扱える環境が整う未来を目指している。こうした環境のもとで意思決定は確かになり、各部門の協働も円滑に進むことで、建築プロセス全体が創造的かつ効率的に進化する社会の到来を信じている。

ＡＩと人の分業化に向かう

ダイダン
茂末　拓

建設業界におけるＢＩＭの未来は「ＡＩと人の分業化」に向かっていく。設計段階では生成ＡＩが膨大な過去事例から最適な建築計画を導き、施工段階ではＡＩが干渉検証や工程調整を担い、現場での意思決定を支援する。維持管理ではＩｏＴと連携し、予測保全や省エネ制御がより高度化する。ＡＩが得意とする領域はＡＩに委ね、人はより創造的な業務に集中できる未来を期待する。

オープンデザイン思考

石本建築事務所
菅原　雄一郎

ＡＩによって描かれる空間は現状では想像の域を超えない。今後ＢＩＭなどから創出される建築データの学習によって、空間・情報・身体スケールが結びつき、さまざまな要件に対するきめ細やかなエクスペリエンスデザインができるようになる。クリエーティブなオープンデザインプロセスによる新しい建築を実現するために、ＢＩＭは重要なプラットフォームとなりえる。

みんなの作業テーブル

構造システム
田中　志のぶ

私の描くＢＩＭの未来は、建物の全情報が共有される「みんなの作業テーブル」である。ＡＩやＩＣＴとの融合により、あらゆる工程で誰もが情報にアクセスし対話しながら即座に更新し合う。これは、立場を超えて一つのテーブルで共に価値を創る光景である。私たちソフトウエア会社は、この対話と協業が生まれる環境実現に向け、技術とサービスを提供していきたい。

ＢＩＭ×ＡＩが紡ぐ

大成建設
チューン　ディッキー

ＢＩＭは設計・時間・コストを統合する進化型システムへと成熟している。今、ＡＩを介して新たな次元が生まれ、分野を超え、創造性との協働の幅を広げる「皆のパートナー」となった。ＢＩＭの未来は固定的でなく、生き物のように常に学び変化し、対話の促進と効率化を実現する。ＢＩＭ×ＡＩによって価値創造と伝統の進化を両立させ、人間中心の建築文化を育んでいきたいと考える。

建築情報構造化時代

ＡＭＤｌａｂ
得能　雅博

発注者を含むすべてのステークホルダーが同じデータ基盤を共有し、建築プロセスを一体的に進められる環境が未来のＢＩＭの姿である。関連法や条例といった意思決定に不可欠な非構造化データも整理され、ＡＩが情報処理を担うことで、人は本質となる判断と意図の設計に専念できる状態を目指したい。

ＢＩＭとＡＩの持続可能都市

佐藤総合計画
中島　慎一

ＢＩＭ化された都市のビッグデータをＡＩが解析し、建築や維持管理の最適解を提示する未来が訪れる。設計者は感性と倫理観をもってＡＩを活用し、創造的判断を行う。ＢＩＭを活用し、敷地内の空間体験や環境性能の検証だけでなく、敷地を超えた予測を通じて、社会に持続可能な価値を創出する。未来のＢＩＭは、人とＡＩが協働し、効率と豊かさを両立する都市を築く基盤となる。

人とＡＩの協調でＤＸ前進

熊谷組
長田　公秀

ＢＩＭの未来は人とＡＩが役割分担して協働する建設ＤＸと建設プロセスの再構築が鍵となる。協働型ＤＸではＡＩが反復作業や品質管理を自動化し、暗黙知を形式知に変換させる。人はデータに基づき判断と最適化で創造的な活動に集中する。ＢＩＭから創出するデータの標準化を通じ、あらゆる人がデータから利益を得て人とＡＩのハイブリッドな協調領域が建築ＤＸを前進させる。

変化する時代を楽しむ

長谷エコーポレーション
中野　達也

ＢＩＭもＡＩも単なる道具に過ぎないが、道具が飛躍的に進化してものづくり自体が大きく変わろうとしている。どちらに進化するか分からないまさにＶＵＣＡの時代、ならばこそ自らの意思を持って皆が進む方向を決めることもできる。設計者が機械を思いどおりに操って美しい建築を合理的に設計する未来。その仕組みのデザインに関われるのもこの時代を生きる特権だ。

ライフサイクルＢＩＭ

ＮＴＴファシリティーズ
中山　桜

当社ではＢＩＭを、設計から維持管理まで包括する建築のライフサイクルマネジメントの基盤と捉えている。ＢＩＭをプラットフォームとしたＡＩやＩＣＴの導入により、建築特有の「難しさ」を乗り越えていける未来を描きたい。さらに、デジタルデータの活用によって、これまで指標化が難しかった空間価値の再評価を通じ、より人に寄り添った設計が可能になることを期待したい。

ＡＩと融合した建築誕生

竹中工務店
能勢　浩三

大学院時代の1983年から42年間、設計分野を中心としたＣＡＤ／ＢＩＭに携わってきた。比較にならないくらいハード・ソフトとも進化しているが、考え方の進化は限定的であり、考えていたことが実現できはじめた段階である。直近のＡＩ技術の進化は目覚ましく、これがＢＩＭと融合して、新たな設計のソフトウエアが誕生して、素晴らしい建築が誕生することに、今後も貢献したい。

目指すべきＢＩＭの本質

三井住友建設
原田　佳幸

建設業界は就業者の減少、資材の高騰、長時間労働、高齢化など様々な課題に直面している。ＢＩＭもまだまだ「課題」に分類されるだろう。今さら不問だと思うがＢＩＭは単なるモデリングソフトではない。建設プロセス全体をデータ産業へ転換するための基盤技術である。私はＢＩＭが業務改善の道具ではなく、産業を再構築するためのインフラとして活用されることを期待している。

昇降機データが都市運営に

東芝エレベータ
松尾　晃弘

建築ＢＩＭと昇降機ＢＩＭが融合した未来。建物全体のライフサイクル管理において、昇降機を含む統合ＢＩＭが標準化され、スマートビルやスマートシティでは昇降機データが都市運営に活用される。ＢＩＭはＣＰＳ（Cyber-Physical System）、ＡＩ、ＩｏＴなどの先進技術と連携し、設計・施工・運用の全工程がリアルタイムでデジタルに接続される。そんな未来は、すぐそこにある。

制約から解放される設計

松田平田設計
松下　雄大

15年後、設計はＢＩＭとスマートグラスで激変する。クライアントもグラスを装着し、ＢＩＭ空間を共有する。要望を声で伝えると、ＡＩがＢＩＭモデルをデザインし、空間に投影。ジェスチャーで微調整し、その場で図面では伝わらない「体験」を共有する。設計の自由度が高まり、ＢＩＭで即座にデータ化され、円滑な合意形成が実現する。これが私の考える「楽しい設計」である。

人はより創造的な業務に

大成建設
山崎　章子

私が描くＢＩＭの未来は、設計情報を一元管理することで様々な不整合を解消し、現場の不具合を減らす世界。意匠・構造・設備の各分野におけるモデル・図面・数量・仕様をリアルタイムで同期し、関係者全員で共有する。納まり確認や改訂管理にはＡＩを活用し、人的負担を軽減させる。結果として、人はより創造的な業務に時間を割けるようになる。

建築をスマートにする力

竹中工務店
吉村　茂久

ＢＩＭは「図面」から「情報」へ、建築をデータで動かす時代の鍵。導入には新しい発想とスキルが求められるが、未来のＢＩＭはＡＩと自動化で直感的に使え、創造に集中できる環境を提供する。効率と品質を両立し、建築をもっとスマートにする力になる。そして、情報だけでなく関わる人々の思いや価値を建築に組み込み、豊かな空間を生み出す基盤となる。

ＢＩＭは社会のインフラに

安藤ハザマ
米満　雄太

ＢＩＭはＩＴ技術の進歩に合わせ、活用の幅が広がり始めた。ＡＩを含む新たな活用が進展する中、未来ある技術とするには、社会の共有財産としてのＢＩＭが必要である。人口減少や災害対策などの社会課題に対し建設業界の枠を超え、様々な人がＢＩＭデータにアクセスし革新的な活用が生まれる。そんな社会全体のインフラとしてＢＩＭデータが活用される未来を描いていきたい。

ＡＩが人の寄り添い支える

中尾工務店
渡部　薫

これからのＢＩＭ連携では、ＡＩ活用の推進に加えて、若手技術者の育成や、思いを丁寧に交わし合える温かなチームづくりがより一層大切になると感じている。標準化を着実に進めることで設計から施工まで情報が心地よくつながり、ＡＩが人と人にそっと寄り添い支える未来を穏やかに優しく思い描いており、その実現に向けて歩んでいきたいと願っている。

若手世代（Under 40）

８月開催のＵ40にはゼネコンや設計事務所などから64人が参加した。８グループに分かれたグループ討議では日頃、ＢＩＭやＤＸに取り組む中で感じているギャップを共有し、それを乗り越える方策やアイデアを話し合い、それぞれが描く「ＢＩＭの未来」について共有した。イベントは４時間にも及んだ。Ｕ40にとっては、ＢＩＭへの向き合い方が大きく変わる〝節目〟の日になった。

現場の課題解決が出発点

デジタル庁
上田　知季

今回、デジタル庁からオブザーバーとして参加した。ＢＩＭ　ＩＤＥＡＴＨＯＮでは、短時間で、建築の現場で皆様が抱えている課題がどんどん出されたことが印象的だった。

ＢＩＭを含むデジタル技術は、あくまでそれ自体が目的ではなく、課題を解決するための手段であり、やはり、「現場で解決したい課題は何か？」という観点から出発することが重要だということを、改めて認識する良いきっかけとなった。こうした取り組みを通じて、個社ではなく、業界全体で知見が共有され、デジタル化が進むことを、デジタル庁としても期待している。

継承・協創・挑戦の貴重な場

ＰＬＵＳ．１
高木　英一

ＢＩＭ　ＩＤＥＡＴＨＯＮは、企業や立場の垣根を超えて本音で語り合い、新しい視点や仲間に出会える貴重な場となった。多様な参加者が率直な議論を重ねていく姿勢が、当社の掲げる「継承・協創・挑戦」と深く重なり、今回の協賛に至った。参加者と課題や可能性を共有できたことに感謝するとともに、ここで得た学びを今後、業界全体に少しでも還元していきたい。企画・準備から運営まで尽力されたボードメンバーのリーダーシップに、心より敬意と感謝を申し上げたい。これからも同様の挑戦の場には積極的に関わり、建設業界の発展に貢献していきたい。

データの活用価値創出

大塚商会
田中　元士

日本の建築業界では、ＢＩＭの活用が「モデル」から「データ」へと本格的に移行をする時期に入っている。この「データ」の活用は単一企業だけでなく、建築に関わるすべてのステークホルダーが連携することで初めて真の効果を発揮するのである。しかし実際にそこには「組織間の壁」という大きな課題がある。ＢＩＭ　ＩＤＥＡＴＨＯＮはそういった組織間の壁を超え、建築業界の未来を本気で考える方々が集まり語り合う場であり、大塚商会もその考えに共感した。これから先もＡＩをはじめとした新たな技術と連携したＢＩＭデータの有効活用法を一緒に考え、建築業界の発展に貢献していきたい。

ＩＤＥＡＴＨＯＮ７年ぶり開催

ＢＩＭに携わる者同士が企業の枠を超え、未来に向けて意見を交わすことが開催の狙い。ボードメンバーとして７年ぶりの開催実現に尽力したのは安井謙介（日建設計）、大越潤（清水建設）、古川智之（久米設計）、山本敦（東畑建築事務所）の４氏。この取り組みに賛同する形で、ＰＬＵＳ．１と大塚商会が運営の下支え役として後援企業に名乗りを上げ、デジタル庁もオブザーバー参加した。中核世代のＯ40には総勢27人が参加し、５グループに分かれ、建設ＤＸのあり方を議論し、業界改革の可能性や次のステップにつながる具体的なアイデアを出し合った。

後援企業
ＰＬＵＳ．１株式会社
株式会社大塚商会
日刊建設通信新聞社

ＩＤＥＡＴＨＯＮは起爆剤

日建設計
安井　謙介

ＢＩＭ　ＩＤＥＡＴＨＯＮは2017―18年に開催され、建築ＢＩＭ推進会議が始まる前の段階で各社の若手がＢＩＭの可能性を共有する場として機能した。25年現在、国のＢＩＭ推進、ＢＩＭ確認申請、言語の標準化が進展し、さらに生成ＡＩの登場により建設業界のＤＸ潮流は加速するだろう。Ｕ40では若手が他業界の事例を踏まえて未来像を再考し、Ｏ40では中核世代が現実的なＤＸの方向性を議論した。建設ＤＸの鍵はＢＩＭであり、法令に基づく判定や商習慣のデジタル化といった壁を、世代を超えた協働で克服する必要がある。ＩＤＥＡＴＨＯＮやＨＡＣＫＡＴＨＯＮはその変革を促す起爆剤である。

企業横断で将来像を再定義

清水建設
大越　潤

前回のＩＤＥＡＴＨＯＮ開催からの7年で、コロナ禍を含む社会環境の変化により、建設業界は大きな転換点を迎えている。一方で、企業間・職種間の情報連携の断絶は依然として残り、ＢＩＭの価値を十分に引き出せていない。前回の参加者が今や各社の中核として活躍するなか、次の10年をどう築くかは現世代を通じた課題である。今回、若手に加えて40歳以上を対象としたのは、業界を率いる層こそが課題に向き合い、企業横断で将来像を再定義する必要があると考えたためだ。特にＢＩＭ標準化は産業基盤を強化する鍵であり、本企画がその議論を深める場となったとしたらその意義は大きい。

道を見つめ直す対話

久米設計
古川　智之

ＢＩＭ　ＩＤＥＡＴＨＯＮは、ＢＩＭの未来を背負う実務者が企業や職種を越えて交わり、互いの経験や葛藤を共有できる場だった。初対面同士の参加者も多い中、それぞれの現場で抱える課題が連鎖し、新たなアイデアと連帯感が芽生えていく光景が印象的であった。Ｕ40の回では「ＢＩＭのすすみゆく道」を一度立ち止まり見つめ直すことをテーマとした。現状の課題を種として多様な将来像が描かれたが、立ち止まって向き合った対話は、ＢＩＭの未来を静かに照らし出していたように感じた。このアイデアソンの対話が、次代のＢＩＭを形づくるきっかけになることを願っている。

未来志向の多様な視点

東畑建築事務所
山本　敦

７年ぶりのＩＤＥＡＴＨＯＮは、Ｕ40とＯ40の二つの枠を設け、日頃とは異なる視点からＢＩＭやＤＸの未来を考える場となった。Ｕ40では、社外の同世代との交流を通じて固定化した前提を離れ、自由闊達に構想が広がり、斬新な着想が次々に生まれる様子が頼もしく映った。同時に、新たなネットワークも育まれ、今後の業界を共に考える心強い仲間を得る機会になっていれば幸いだ。Ｏ40では豊富な実務知にもとづく現場起点の提案が多く、実装までの道筋が具体化している印象を受けた。固定観念を疑い、未来志向の多様な視点が交わることこそが、これからのＢＩＭの発展へとつながることを改めて実感した。

PLUS.1　大塚商会　建設通信新聞